

1人1台端末の活用による、日常生活の質を向上させる実践事例

学校名	倉敷まきび支援学校	指導者名	仙田 義孝
実践場面 (教科名)	作業学習 (職業)	単元・題材名	報告をしよう
学習目標・ ねらい	作業が終わった際に、作業の終わりを自分から伝えることができる。		
対象児童生徒 の 実態	知的障害部門 高等部 生活コース 1年		
	<ul style="list-style-type: none"> ・牛乳パックを煮た後、ふやけたパックの表面のラミネートを剥がしたり、それを乾燥させた物を小さく裂いたりする作業では、準備した作業量(1セット)を継続して取り組むことができる。 ・慣れた作業は、個別の指示があれば、確実に実行できる。 ・1セット分の作業が終わっても、自分からは作業完了の意思表示はなく、次の指示があるまで待っていることが多い。 ・発語がなく、自分から伝えようとする場面は少ない。余暇の過ごし方を描いたカードや、トイレカードは、自発的に使える。これらは、離れた場所にいる教師に持って行き、提示することができる。 		
活用の概要			
<p>●本人の様子</p> <p>作業終了時に作業の終了を音声で伝えることができれば、周囲への発信力が身につくと考えVOCAを使用した。ボタンを不必要に連打し、作業の妨げになったので使用を止めた。そこで、iPadの表示画面に「できました」アイコンのみを配置したコミュニケーション支援アプリを使用した。</p> <p>最初は作業1セットの終了時、本人と一緒に作業の区切りを確認し、実際に操作して見せたものの、自発的に触ろうとする様子は見られなかった。そのため手を添えてアイコンをタップしiPadに発話させ、作業量を少なめに設定し、アイコンをタップする回数が増えるように配慮した。2日目の実践時に、40回を越えたあたりから、自分でタップする場面が見られ始めた。3日目からは7割程度まで自発的に押せるようになってきた。作業場面においては相手に伝える内容が一つではないので、複数のカードから言葉を選択できるように、4日目以降は、作業時間に必要であり、活用実績もあるトイレカードを追加し、複数カードを使い分ける場面に対応できるようにした。(図1)</p>			
			
		図1. アプリの表示画面	写真1. 使用風景
<p>●使用アプリについて</p> <p>今回使用したアプリは「えこみゆ」(図2)と呼ばれるコミュニケーション支援アプリである。このアプリは、300枚までのカードならば、無料で使用できるとともに、オリジナルのカードも自由にカード設定ができ、アイコンにiPadのカメラアプリで直接撮影した写真を使用できたり、アイコンを選択したときの音声出力もiPadで直接録音できたりと、その場でも簡単に作成して利用できる。ただ、操作しやすい反面、作成したカードの修正はできないので、修正が必要な場合は一端削除後、再度作成し直す必要がある。</p>			
			
		図2. アイコン	
成果や活用のポイント ・ 課題、改善点等	<p>成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・iPadでは、不必要に連打することもなく、作業が終了後すぐ「できました」アイコンをタップして、報告ができるようになった。 ・トイレのアイコンを追加した場合でも、「トイレ」と「できました」アイコンの2種類を正しく使い分けることができている。 <p>今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作業関連のアイコン「次の材料をください」も使い分けられるようにしていきたい。 ・アプリの起動を含め自分で操作できるようにしていきたい。 ・iPadを持って移動し、伝えたい人のところで意思表示に使うことができるようにしていきたい。 ・使用アプリを、場面毎にカードセットを使い分けられるアプリに変え、日常的に使っている余暇カードもiPadアプリでの利用に統合していくとともに更に使えるカードを増やしていきたい。 		